

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立南砺福野高等学校・教諭・小林 悠樹
- 2 研修期間 平成30年9月17日(月)～平成30年9月24日(月) 8日間
- 3 調査研究課題 イノベーションを生み出す風土とそれを支える教育について
- 4 研修機関等 シアトル : 在シアトル日本国総領事館 訪問
ビーコンヒルインターナショナル小学校 視察
ジョンスタンフォードインターナショナル小学校視察 他
サンフランシスコ: サンリアンドロ高校 視察 他

5 研修の概要

【シアトル】

①在シアトル日本国総領事館

シアトルの教育制度について伺った。初めに山田総領事のレクチャーがあったが、そこで、「日本の教育は企画大量生産のための教育を引きずっている。これにはグループで扱いやすい社会人を作っている側面があり、イノベーションの妨げとなっている」というお話があった。日本の教育の良さを活かしつつ、これからの社会で求められる人材を育成する教育について考えさせられた。

②ビーコンヒルインターナショナル小学校

多様な人種の児童が通う小学校である。アジア太平洋系が35%、ヒスパニックが35%、白人が13%、アフリカ系アメリカ人が10%である。母語が英語でない児童も多く、英語・中国語・スペイン語のクラスがある。中国語・スペイン語のクラスであっても、英語での授業がある。

授業はオープンスペースで行なっている。1つの空間で3つのクラスの授業を行っていて、1クラスあたり25～30人である。それぞれのクラスは同じ内容の授業を行っており、同じペースで授業が進められるよう、それぞれの教員が工夫して授業をしている。授業の進行を行う教員の他に、各クラスに指導助手がいる。保護者が児童に付き添っている場合もあり、1クラスに最低2人以上の大人(教員含む)がついていることになる。

各授業スペースには電子黒板機能付きのプロジェクタ・スクリーン、投影用のパソコン、実物投影機が設置されている。「スライド+電子黒板中心の進行」と「実物投影機中心の進行」の二つの授業スタイルがほとんどであった。ホワイトボードもあるが、それを用いた板書中心の授業を行っている教員はいない。子どもたちは机ではなく絨毯に直座りし、スクリーンを囲んで授業に参加するというスタイルである。必要に応じて、机に移動してそれぞれの課題に取り組む。

また、タブレット PC が格納されていると思われるカートが設置されていた。ただし、この日の授業では、タブレット PC を用いた授業は行われていなかった。

③ジョンスタンフォードインターナショナル小学校

最初に、キンダークラスの授業を視察。オズボットという、色を認識して進行をプログラミングできるロボットを用いた授業を行っていた。子どもたちはマジックで紙に線を書き、ロボットを動かしていた。少し上の学年の子どもたちは、Chromebook 上でプログラムを作り、ロボットを動かしているようであった。授業は図書室で行っており、ロボットの充電、準備、片付けは図書室に常駐しているスタッフが行っていた。

次に日本語での授業を見学。子どもたちは一人ずつ小さなホワイトボードを持っていて、先生からの問いの答えをホワイトボードに書き、それを掲げて発表していた。ビーコンヒル小学校とは違い、子どもたちは基本的に机に座って授業に参加する。実物投影機やプロジェクタは設置されているが、ホワイトボードの板書も併用している。この教室の後ろにはタブレット PC (Chromebook) が置かれていたが、今回の授業では使用していなかった。ただ、問題解決の道具として、常にテクノロジーに触れることができる環境を意識させているようである。クラスには教員に加え、指導助手も常駐している。理解が遅れている子どもに個別対応して指導していた。

【サンフランシスコ】

①サンリアンドロ高校

日本での中学3年～高校3年までが通う。単位制である。PBL（プロジェクトベースラーニング）を重視していて、目的のために学んでいるということを強調している。現実の世界にも当てはまるようなプロジェクトを通して教材を学んでいく。

●授業1 高度ものづくり

「Gravit designer」というオンラインで使えるドローツールをブラウザ上で起動し、デザインしたものを3Dプリンタから出力し、オリジナルのアクセサリーを製作する。今回は我々が「客」という設定で、実際にアクセサリーを製作してもらった。学生はこちらが書いた文字をスマートフォン（個人のもの）で撮影し、Evernote 経由で学校のコンピュータで写真を開けるようにして、Gravit designer で加工をする。どのように写真を転送するかは学生に任されているようで、Gmail で送っている学生もいた。完成したデータを3Dプリンタが接続されたコンピュータに転送し、出力されたものにチェーン等をつけ、アクセサリーが完成した。

●授業2 ブロードキャスト

学校内にテレビ局のようなスタジオ設備がある。キャスター、カメラマン、スイッチャー、ミキサーなど役割を分担し、スタジオでの生放送を意識した実習を行っていた。地域の協力によって始まった授業で、教員はテレビ局で働いているプロフェッショナルである。

●授業3 デジタルメディア

動画や静止画を製作する。コンピュータは iMac で、Adobe CreativeCloud や Final Cut Pro、DaVinci Resolve など、ソフトウェアも充実している。プロジェクトは、教員が指定するものと、学生が自分で決められるものがある。視察した授業はシニア（高校3年生）で、グラフィック、アニメーション、ムービーなど、好きな手段を選んで作品を製作していた。

●授業4 木工

最新のテクノロジーだけでなく、昔からの技術も重視している。

●授業5 法医学

この高校のオリジナルプログラムで、殺人事件の現場を、法律や生物学の知識を用いて分析し、犯罪を解決していくという授業だった。

●授業6 物理

学んだ力学の知識を駆使して、フットボールのヘルメットを作る、というプロジェクトの授業であった。ただ、説明を受けただけで、学生たちがどのように学んでいるかは見ることはできなかった。

【視察を通して】

小学校におけるバイリンガル教育、プログラミング教育、プロジェクト型の学習や、対話的な学びなど、アメリカでの教育は、日本での次期学習指導要領の改定内容と似ていると感じた。タブレットPCの活用については視察することができなかったが、テクノロジーは問題解決の道具として、当たり前のように活用されているようであった。実物投影機など、教員による視聴覚機器としてのICT活用も当たり前のように行われていたが、多言語の環境における授業では、見せなければ伝わらないことも多いので、アメリカの教育事情においては、最低限必要な機器なのであろうと感じた。

また、学校区におけるミッションの設定や、地域との連携、寄付金による機材設備の充実など、地域みんなで教育を作っているという印象を受けた。

ただ、アメリカの教育をそのまま日本でやったところで、うまくいくわけではない。日本の教育の良さを生かしつつ、アメリカの教育の良いところも取り入れ、これからの富山県の教育に還元していきたい。

最後になりますが、このような貴重な経験をくださった富山経済同友会の皆さま、富山県教育委員会の皆さまに感謝申し上げます。